

関西のことばと文化

—小説・詩・落語・マンガ・映画—

小 谷 博 泰

はじめに

この論題の副題に記した各項目を一括りにして表すことばが見つからないので、便宜的に文化と呼んでおいた。マンガなどはいわゆるサブ・カルチャーに含まれる。そこから考えて、あるいはカルチャーと総称しても良いかもしれない。

文化といえば、たとえば織田作之助の『夫婦善哉』^{めおとぜんざい}で次のような箇所がある。

不粋な客から、芸者になったのはよくよくの訳があつてのことやろ、全体お前の父親は……と訊かれると、(中略)「私のお父つあんは旦那さんみたいに良え男前や」と外らしたりして悪趣味極まったが、それが愛嬌になった。

72ページ

(『織田作之助全集 1』1970年2月)

別の箇所では次のような場面がある。

そんな柳吉に蝶子はひそかにそこはかとなき恋しさを感じるのだが、癖で甘ったるい気分は外に出せず、着物の裾をひらいた長襦袢の膝でべたりと坐るなり「なんや、まだたいてるのんか、えらい暇かかって何してるのや」こんな口を利いた。

77ページ

この蝶子は、お客さんには、冗談ふうではあるが、言葉上手に、心にもなく褒めているが、夫の柳吉には、褒め言葉が使えないで、心とはうらはらに嫌味

を言う。商売人の街の大阪人らしい言語表現のパターンで、こうした言語行動の一傾向を文化と呼ぶのがふさわしいかもしれないが、そうした文化論的な考察は後のこととして、ここでは文化研究の材料となる諸々の言語資料について、そこに使用されている関西方言の諸相について、おおまかに俯瞰すべく調べた。

もって文学研究のために資するだけでなく、なによりも国語教育に役立てたいと念じている(注1)。テレビなどのおかげ(?)で共通語が身近なものとなっ
てはいるが、関西の多くの住民にとって、共通語ははまだ学習によって、まずは知識として得られるもので、意味にしろ用法にしろ辞書的な段階のものを基本に導入される。文法を考えるにも、与えられたことばとしての共通語をもとに教えられて知識として得るものである。ものごころがつくに従って、個人的な体験をとめないながら自ずから獲得して来たものとは言えない。

関西人にとっての母語は関西弁であり、これと共通語では、音声からして大きな違いがある。「関西語」は日本共通語のようなモーラーの長さが等間隔の言語ではなく、それを基準にしつつも母音が伸び縮みするシラブル言語の様相も交える。アクセントも関東式のアクセント核のいかんによって決まる型によつたものだけではない。一音節のなかで音が上下することもあれば、後に助詞がつくかどうかによって語末のアクセントが変わったりする(注2)。ア、オなどの母音の発声法も、子音の強さも共通語とは違いが大きい。

大きく言えば、話の発想や構成などにおいても、無意識の段階から大きな相違を呈しているであろう。

また、現在の国語教育では、コミュニケーション能力の育成ということが重視されている。対話能力となれば、関西人には関西弁、あるいは関西弁の要素を交えた共通語による対話ということが重要になる。そこに関西の言語についての自覚的運用が課題になる。関西人に限るまいが、少なくとも、共通語では、言葉を使つての喧嘩も出来ないのである。

ここでは、関西弁、といつても甲南大学の位置する神戸の神戸弁を中心に、播州弁、大阪弁、京都弁に関して触れ、有吉佐和子作品の和歌山弁などについては、後日の課題とする。

1、神戸

① 灰谷健次郎『太陽の子』

神戸に縁の深かった作家といえば、児童文学・少年少女文学の分野ではあるが、まず灰谷健次郎があげられようか。神戸出身で、晩年に沖縄に移った以外は、一生の多くを神戸に暮らし、あるいは神戸の対岸の淡路島で暮らしている。

次に、灰谷健次郎の略歴を参考に、インタビュー記事の引用をまぜて神戸とのかかわりを示した。

1934年 神戸市兵庫区に七人兄弟の三男として生まれる。

「生まれた場所は、現在のJR兵庫駅の裏であった。一つの井戸を四、五軒で使うような下町」「父は三菱神戸造船所の旋盤工。露天商を営む祖父母がいた。」

1942年（8歳）神戸市立須佐小学校入学。

「小学校へ入ったのは昭和十七年で、すでに米英との戦争が始まっていましたね。大本营は景気のいい情報をどんどん流し、子どもまで軍国調に染まっていました」「須磨海岸へ毎日のように泳ぎに行った。」

1944年 兵庫県朝来郡和田山町に集団疎開、神戸大空襲のち鈴蘭台に移る。

「登校する学校もなく、友達もなく、ぼくはただひたすら防空壕に入っ
て考えごとをしていました。」敗戦後、岡山県水島市に疎開。

1947年 神戸市立舞子小学校に編入。

1948年（14歳）神戸市立垂水中学校に入学。

1951年 商店に住み込んで働く傍ら、定時制の神戸市立湊高校に通う。

「神戸の福原という遊郭につきだし菓子を入れている菓子の製造販売店に、定時制高校へ通わせてもらうという条件づきで勤めました。」港湾労働者、ゴム工場などを転々とする。

1953年 三菱造船所の社外工として電気溶接の仕事につく。

1954年（20歳）大阪学芸大学入学。

1956年（22歳）小学校教員になり、神戸市立妙法寺小学校に赴任。

1956年 神戸市立本状小学校に異動。

- 1961年 東灘小学校に異動。
 1967年 長兄、神経症により自死。
 1976年 『太陽の子』連載開始。
 1980年 淡路島に移住。
 1983年 「太陽の子保育園」を神戸に開園。
 1990年 沖縄に移住。

(資料として『こんにちは！灰谷健次郎です』(新潮社刊行パンフレット)を使用)

灰谷の作品の中で、登場人物の少年が出会った老人に話しかける次のような箇所がある。共通語には翻訳できない方言の持つニュアンスをよく表している。

「あなたのいうことはわかりません」(中略) あなたのいうことはわかりませんとはなんと気持ちのこもらない言い方だろうとぼくは思った。ぼくは自分のことばでしゃべることにした。(中略)「おじいちゃんのいうことようわからへんわ」

(灰谷健次郎『我利馬^{ガリバー}の船出』新潮文庫1991年2月 182ページ)

さて、灰谷の作品の中で神戸を舞台としていて、上記の略年譜と対象すればうかがわれるように、作者の実体験につながるの深い作品として、まず『太陽の子』があげられる。

登場人物が何人もいる中から、主要な次の3人だけを記す。

ふうちゃん：大峯芙由子。神戸生まれ。小学校六年生。アキレス腱を切って入院する。琉球料理の店、おきなわ亭に自宅がある。

おとうさん：大峰直夫。八重山の波照間島の生まれ。一四、五歳のときに沖縄が戦場となる。沖縄からおきなわ亭のオジやんをたよって神戸に来た。おきなわ亭で働いていたが、半年前から心を病み、神経科の病院に通っている。のち、自死。

おかあさん：沖縄の首里の生まれ。おきなわ亭で働いている。

おとうさんの神経症と自死からは、作者の自死した長兄の面影がうかがえよ

う。また、小説の舞台は、作者の過ごした神戸の兵庫区にあてはまるとされる。

以下、会話の例を敬語に関連して示す。(お母さんは、お父さんのことをふうちゃんに話すとき、お父さんに敬語を使う。ふうちゃんは使わない。)

- A ふうちゃん→おかあさん B おかあさん→ふうちゃん
C ふうちゃん→おとうさん D ふうちゃん→オジヤン

- A けど、おかあさんはじきに首里はええ、神戸はあかんっていうやろ。 9ページ
- C おとうさん、そんな気イせえへんか 22ページ
- A おとうさんは? B 奥にいてはるよ 38ページ
- D おじいちゃん。うちに泊まるのんひさしぶりやなァ 49ページ
- D もう、うちのおじいちゃんになってしもたらどうや。 50ページ
- B おとうさん、いま寝てはる 58ページ
- A おとうさんにお昼寝させたらあかんって、あれだけ、わたしがたのんでたやろ
- B そんなわけで、おとうさん、ちょっとお昼寝してはるんや 59ページ
- A おじいちゃんは B ちょっとアパートに帰ってはる
- A おじいちゃん、すぐくる?
- A どうして、わたしにおとうさんのことをかくすんや 166ページ
- A そやけど、おとうさん、どこへいったん 167ページ
- A なんや、おとうさんはおじいちゃんどこにいてたんか。 169ページ

ふうちゃんは、亡くなった人のことについて話したときに、はじめてハル敬語が使われた。そのち梶山先生の言動についてハル敬語を使った例もあるが、わずかである。

- A キヨシ君のおねえさん、なんで死にはったんやろなァ 198ページ
- A 疲れはったいうて、なにに疲れはったんやろ

ふうちゃん→梶山先生

ヤラブの凧はみんなそのカーブヤーなんだって。(略) 大きな子どもはピキダーという八角凧を作って揚げるって、おとうさんがいっていました。

55ページ

おとうさんはよく自慢するんです。

ふうちゃん→キヨシ少年

梶山先生、なんであかん教師っていわはったんやろ

219ページ

梶山先生はひいきをするような先生とちがうで

(資料 灰谷健次郎『太陽の子』1988年1月理論社第33刷による)

ふうちゃんの親の世代ではハル敬語をよく使っているが、ふうちゃんは、ほとんど使わない。ふうちゃんがキヨシくんの亡くなったお姉さんについてハル敬語を使ったのは、亡き人に対する尊厳の気持ちからとも取れる。担任の梶山先生についてハルを使った場面でも、意外な場面に出会った後の心の強い動きがある。なお、元来の神戸弁であったテヤ敬語は、この小説中には見られない。ちなみに、お母さんたちのハル敬語は、沖縄を出て神戸に来てから学んだものである。

② 野坂昭如『火垂るの墓』

野坂昭如は関東の出身ではあるが、言語形成期を神戸で育っている。

1930年 (昭和5年) 神奈川県鎌倉郡に生まれる。母は出産後死亡。

1931年 神戸市永手町の張満谷家の養子となる。

1937年 神戸市立成徳小学校に入学。

1943年 神戸市立第一中学校に入学。

1945年 6月2日、神戸市灘区中郷町で空襲にあい、養父は戦災死、養母は重体。

西宮の親戚宅に奇遇。疎開先の福井県坂井郡で終戦を迎える。妹(養父母の養女) 恵子、栄養失調のため死去。九月、養父の兄を頼り、大阪府

守口に行く。

1946年 大阪市立中学校に転校。

参照：新潮現代文学『野坂昭如 エロ事師たち・火垂るの墓』昭和56年11月
下線は本稿筆者が加えたもので、以下同じ。

以上の略年譜からも、野坂昭如と神戸のつながりが知れよう。そして、彼の神戸における実体験を背景に生まれた小説のなかでも、代表的なものが『火垂るの墓』である。

地名に次のような例がある。省線三宮駅、西宮満地谷、葺合、生田、灘、須磨、御影の浜（に近い自宅）、大阪湾、石屋川、御影第一第二国民学校、御影公会堂、六甲山阪神石屋川、西宮回生病院、六甲道駅、住吉、芦屋、夙川、西宮北口、仁川。

主人公の清太と妹の節子が、母親のことにハル敬語を使っている場面がある。「お母ちゃん、まだキイキ痛いのん?」「うん空襲で怪我しはってん」「指輪もうせえへんのかな、節子にくれはったんやろか」（23ページ）。

「向かいの家の娘」なども、次のようにハル敬語を使っている。

「清太さん、お母さんに会いはった?」

「はよいったげな、怪我^{けが}しはったのよ」

「お気の毒やねえ、なにかできることあったらいうて頂戴、そや乾パンもうもろた?」

「うちら二階の教室やねん、みんないてるからきいへん?」

この舞台は神戸市の灘区であり、ハル敬語とテヤ敬語の境界を東灘区の住吉川とする研究（注3）からすると、神戸弁のテヤ敬語が使われているはずの土地で、大阪・西宮・芦屋などで使われていたハル敬語を使わせている、ということになる。

ところが、清太が西宮の小母さん（未亡人）に移ってから、西宮の小母さんが、ハル敬語を使わないで、次のように敬語の少ない、神戸弁のしゃべりかたとおぼしき話しかたをしている。本稿筆者が四角で囲んだ「おってやないの」はテヤ敬語に分類しようとすれば可能な表現である。

「海軍さんはええわ、トラック使うてはこぶんやから」

「軍人さんの家族ばかりぜいたくして」

「幸彦ゆきひこは中学三年生やったけど、社長さんに立派りっぺいにあいさつして賞められたもんです、しっかりしとったわ、あのこは」

「お母さんの着物な、いうてはわるいがもう用もないのやし、お米に替えたらどう？小母おぼさんも前から少しずつ物物交換して、足し前してたんよ」

「これで一斗にはなる思うよ、清太さんも栄養つけな、体丈夫にして兵隊さんいくねんやろ」

「清太さんもう大きいねんから、助け合いうこと考えてくれな、あんたはお米ちっとも出さんと、それで御飯食べたいいうても、そらいけませんよ、通りません」

「なんや、そんなら小母さんが、ずるいことしてるいうの、えらいこというねえ、みなごし二人あずかつたってそういわれたら世話ないわ、よろし、御飯別々にしましよ、それやったら文句ないでしょ、それでな清太さん、あんたとこ東京にも親戚いてるんでしょ、お母さんの実家でなんやらいう人おおつてやないの、手紙出したらどう？ 西宮かていつ空襲されるかわからんよ」

「こいさんも兄さんも、御国のために働いてるんでっさかい、せめてあんた泣かせんようにしたらどないやの、うるそうて寝られへん」

「よしなさい、この戦争中になんですか、怒られるのは小母さんですよ、非常識な」

「ほんまにえらい疫病神がまいこんで来たもんや、空襲いうたって役にも立たんし、そんなに命惜しいねんやったら、横穴で住んどったらええのに」
「はあ、まあ気イつけてな、節ちゃんさいなら」

(資料 野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』1972年1月新潮社、を使用。ルビの一部省略。また短い短編小説なのでページ数は省略した)

神戸の住民に西宮でも使われるハル敬語をしゃべらせ、西宮の住民に神戸弁をしゃべらせている結果となっている。なぜそのように、言葉と土地を入れ替えたかといえ、考えられる答えとしては、西宮の小母さんのきつい物言いに

は、神戸弁がふさわしいから、神戸弁を西宮在住のきつい小母さんに使わせたと考えられよう。それに対し、本来は神戸弁を使っている可能性の高い神戸市灘区の住民に、やわらかな物言いのハル敬語を使わせたことにより、やさしさを浮き立たせる効果が生じている。舞台が大阪弁のハル敬語と神戸弁のテヤ敬語の境界にあった地域だから、ということもあろう。

2、大阪

① 田辺聖子「ジョゼと虎と魚たち」

田辺聖子の作品では、会社員、自営業者、自由業に携わる者、あるいはその家族が登場することが多い。その、関西方言については、すでに拙稿で述べたことがある（注4）。この作品ではもっと、貧しい階層の登場人物が主人公である。

すなわち、主人公のジョゼ（本名クミ）は、子どものころから脳性麻痺と診断されている25歳の女性。生活保護で祖母と暮らしている。外出の時は車椅子。祖母の死後のある日、恒夫と動物園に行く。

「旅行のことをアタイはいうてるねん。こんな綺麗な景色、はじめてや」

「あんたのはじめてと、アタイのはじめてとは質がちがう。アタイのはじめでは中身濃いのにや。アタイが海見たん、これが二度目やもん」

「あかん。オシッコなんかしたらあかん！生意気や！早よ出え」

「あんた、アタイのこと、ジョゼ、呼ばな返事せえへんよ。これから」

「後半、雨が降ってん。それでお父ちゃんがアタイを背負うて自分の上衣を上からかけてくれはってん」

「うるさい。死ね！阿呆^{あほう}！知るかい、そんなこと」

（資料 角川文庫『ジョゼと虎と魚たち』 1982年）

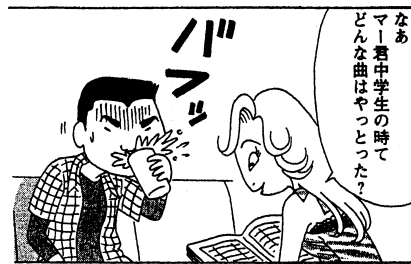
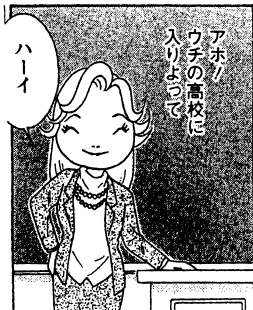
このように、たまにハル敬語が使われるにしろ、大阪の女性にしては、ぞんざいな言葉使いが見られる。なお、一人称の「アタイ」は、映画（『ジョゼと虎と魚たち』公開2003年、犬童一心監督、脚本渡辺あや、池脇千鶴など出演）では「うち」となっていた。この作品の場合、原作と映画の違いが大きいことも

一つの原因か。現在では「うち」が一般的で、当然原作の「アタイ」には作者の強い意図が働いているのであろう。

なお、映画資料はDVDによる。以下同じ。(ただし、本稿筆者の聞きとりが完全とは言えないかもしれぬことをお断りする。)

② 漫画における「とる」「よる」(付、神戸弁「とう」)

ところで、文章語の「一ている」に相当する表現として、大阪では「一てる」のほか、男性は「一とる」「一よる」を使う。神戸弁の「一とる(とう)」「一よる」が男女に共用されて、アスペクトを表すのに対し、大阪弁の「一とる」「一よる」は、身内関係にある目下、または同等の者に対して使われ、親しみの感情をおもてに現すもので、ときには侮蔑、ときには親しみをこめた賞賛の表現となる。次の例は女性(高校の教師)であるが、「一とる」「一よる」を使っていて、大阪の女性も地域によっては、男性同様にこれを使うかと疑わせる資料である(森下裕美『大阪ハムレット』1(双葉社)2006年6月128ページ、87ページ)。ちなみに、この「よる」は、自分より年下の者に対する批難しながらの親愛の情を表しているようである(注5)。



「よる」はめずらしいが、「とる」は他のマンガでも女性の使う例が見られる。(たとえば、朝日新聞朝刊に連載された4コマ漫画、いしいひさいち作『となりの山田くん』のお祖母さんなど)。

ちなみに、神戸弁の「とう(と一)」は、『神戸在住』に頻繁に使われている。

例があったが、男子が使っている。この漫画では、神戸人なら例えば「一してみィ」というところを、「一しとうみ」と、京都弁を使わせている例がある。神戸弁の「一してみィ」は、語尾をあげる（「こうしたら」、と柔らかく誘導する）のと、語尾を下げる（「こうしろ」という強い命令、または、行為に対するきつい非難）との二通りの意味があり、文字では、それが表しにくいので京都弁を借用した可能性もあるが、それにしても神戸弁話者が読むと不自然に感じる。この作者は作品中のこなれた神戸弁から考えると、関西に住んだ経験があると思われるが、しかし、神戸弁、大阪弁、京都弁の区別については、詳細にわたって分別できるまでには至らなかったのか、あるいは創作上の意図があって混用したのかも知れない。

映画では、例えば、『幻の光』（宮本輝原作、是枝裕和監督、出演江角マキコなど1995年）では、大阪弁の地域であるはずの所に、「ーえ」と京都弁まじりの話者が登場する。京都と大阪では地域が近いので、事実としてもこのような混在が起りかねない、とはいうものの、関西弁話者の実感からすると、いささか不自然である。ただ、関西の外の人間からすれば、大阪弁と京都弁のこうした混在が、さして気にはならない状況であろうことは推測できよう。

③ 映画の中のハル敬語

なお、大阪弁の現れる映画は多いが、日本映画が無声映画からトーキー映画に変わった時代の初期のものとして、溝口健二の次の作品があげられる。

『難波^{エレジー}悲歌』1936年公開 監督・原作 溝口健二脚色 依田義賢 出演 山田五十鈴ほか

主人公（若いOL・村井アヤ子）の自宅の場面

A 妹「お姉ちゃん、なにしてたん。

はよう帰ってきてくれたらええのに。

また、あの人、来てはんねん」

姉「おいでやす」

父の勤めていた会社の社員（借金取り）

「おいでやすやおまへんで。

いまもな、妹はんにそないいうたんや。

おとつあん、いったい、どうするつもりだあ。

あの金、弁償せんつもりだっか

姉「いいえ、そんなことあらしまへん。

ほうぼう聞いてみまわってはんのんです」

B 姉の恋人

「ごめんやす。こんにちは。こんにちは。

おはようさん。

あのう、あやこさん、おいでだっしゃろか。」

妹「どなたはんでおます」

姉の恋人

「お店でいっしょに働いているもんだすけど、

おいでだっしゃろか」

妹「あの、姉ちゃん、いやはれしまへん」

姉の恋人

「どこぞへいたはりまんねんやろか」

妹「いいえ。あのう、四五日まえから帰ってきはれしまへんねんけど」

この映画では、他人に対し、Aでは父の行動について娘が、Bでは姉の行動について妹がハル敬語を使っている。家族の行動について、聞き手に絶対敬語を使って話すという古き関西弁の用法がここに見られる。

④ 上方落語のハル敬語（付、テヤ敬語）

笑福亭松鶴は、次のように使用人階級の者の台詞には「はる」主に「なはる」を従に使い、旦那階級のものには「なさる」を主に「なはる」を従に使わせている。船場言葉の伝統にそった用法かと思われる。

熊五郎：もし、若旦那、あんた何や、胸のうちに思たはることがあるそうでんな。ええ、ほかの人にはしゃべらへんが、わたいいには、何でも打ち明けると、こない言いはったそうでんな。なあ、おっしゃれー。(中略)

若旦那：目えむいてなはんな。なあな熊さん、あんたにやったら、よう話しするちゅうたけどな、必ず笑とくん^{わろ}なさんなや。

(CD『てんこもり！六代目笑福亭松鶴全集三』「崇徳院」昭和1970年1月収録 NHKサービスセンター発行)

旦那： 今、何時やと思てなはる。もう、かれこれ夕方の四時でっせ。(中略) ははあ、分かった、さだ吉、もうちょっと前へ出なはれ。もう少し前へ出なはれ。お前さん、また、道で芝居見てなさってんやろ。(中略) お前さん、芝居見てなさったな。

(CD『てんこもり！六代目笑福亭松鶴全集二』「藏丁稚」1973年4月収録)

なお、落語の説明部分では「なはる」を使っているが、松鶴の講演では「はる」を使っていることからすると、松鶴自身は普段、「はる」を使っていたかと思われる(「わたしの自叙伝」(『てんこもり！笑福亭松鶴全集 特典盤』NHKサービスセンター)ではハルを使用している)。こうした使い分けは、松鶴が船場に近い地域で生まれたことと関係するであろう。(注9)

例えば同じ「崇徳院」を演じて、桂米朝は

熊さん：あんた患うてはりまんねやてな

あんたのためやたらなんぼでも、どんなことでもやりまっせ。どんなことかおっしゃれ

若旦那：そやけど、わたいがこんなこと言うたさかいちゅうて、あんた笑うたらあかんで

(『特選！米朝落語全集 第29集「崇徳院」』東芝EMI株式会社による) となっている。熊さん若旦那も「なはる」を使い、熊は「はる」、若旦那は「やはる」「おいなはる」をも使ってはいるが、両者間に耳にたつほどの違いは感じられなかった。

桂枝雀の「崇徳院」でも、「なはる」「はる」があって「なさる」が聞かれない。若旦那も「はる」を使っている。米朝の「おいなはる」に「お越しになった」が当てられている箇所がある。いずれにしろ、松鶴とはハル敬語の使用が違っている。(CD『枝雀落語大全 第3集』東芝EMI「崇徳院」)あるいは米

朝、枝雀の出身地などが原因で、大阪出身の松鶴がおのずから船場言葉の伝統によったのとは、相違が生じた可能性が考えられるが、この問題については、さらに多くの事例にわたって調べる必要があるであろう。

なお、松鶴には、大阪弁(?)のテヤ敬語を使った例がある。

「ほんまに、どないしててやってん」(略)

「しかし、よう、このうちが分かってやったな」(略)

「きれいになってやったこと」

(CD 『てんこもり! 六代目笑福亭松鶴全集』九 発行NHKサービスセンター 「子は銚」昭和50年6月収録)

女性が訪ねて行った先の「お姉さん(年上の親しい知人)」がテヤ敬語(テ敬語)に少しハル敬語を交えた言葉でしゃべっている。そのお姉さんのテヤ敬語は、古くは大阪でも使われたものを再現したものかと思われる。ただし、主人公がテヤ敬語の使われている地方、例えば神戸へはるばる出かけて行って、その地方の人(お姉さん)と話していることを、テヤ敬語の使用によって表現したものと考えることも可能だが、いかがであろう。もしそうだとすると、主人公も、もとはこのお姉さんと同じ地方の出身者だったのかもしれないのだが。(注10)

3、播磨

北播磨の東条町出身の、坂本遼の詩や小説には、次のように播州弁のテヤ敬語が見られる。詩集『たんぼぼ』、小説集『百姓の話』は、1927年の出版であり、方言が文学作品に見られたものの中では、そうとうに古いものと思われる。おそらく、播州弁使用例としては、最も古いものであろう。この後も、テヤ敬語を使用した文学作品はわずなものにすぎないであろう。(テヤ敬語部分に下線を引いて示す)

あしたしばるがある。

ながいあいだあをぞらつづきであつたのやからあしたもひよりであればよい
 かなあ とだれもいうてをる。

きのふ 先生におまえがおいてゐた花さしとおまえのしやしんをあげた。た
 いへんよろこんでやつた。

それで きょう そのおれいやというて おまえに毛糸のじばんをあんでや
 らうというてやつた。そして身のたけは何尺かとたづねてやつた。

「五尺八寸です。」

といふとびつくりしてやつた。そうしてりつばなからだやというて にこにこ
 して おまえのしやしんをみとつてやつた。

圭よよろこんでくれ。

（「時雨」の部分。詩集『たんぼぼ』、ただし『坂本遼作品集』1981年所収 による。仮名遣いの間違いは原文のままにした）

次は小説中の北播磨方言である。

「お母さん、村長さんとこの芋をとつてこい。今から往たら誰も見やへん。
 こないな時分に峠田へ誰がくるもんで！」

「阿呆云ふない。そないな曲り事をして世が渡れると思ふとんのこ。罰があ
 たることが分からんのこ！ど阿呆めがツ！」

「何が阿呆で。貴様こそ阿呆じやがい。そないして、ひからびてしまへ。そ
 ない神様があるねやつたら、こない苦しまへんわ。食ふ物のない者が、食ふも
 ののあり余る人のをとつて何悪いので！」

「どないなとしやがれ、ど盗賊！」

（「芋」の中の母親と息子の喧嘩の場面である。『百姓の話』、ただし『坂本遼作
 品集』1981年36ページによる）

坂本遼作品の播州弁については、すでに拙稿（注11）で触れたことがある。

4、京都

① 川端康成『古都』

川端康成は大阪市北区で生まれ、言語形成期は大阪で過ごしている。1961年に朝日新聞に連載した『古都』は、京都を舞台としている。

この小説では、主人公はじめ、京都の土地の登場人物に限れば、いずれも古風で典雅な京都弁を使っている。登場人物、対話の相手などによって、話に使用されることばに少しの違いはあるが、いかにも同じ言語地域で育った者と思われる使用言語である。

千重子 捨子にさわらんといいて。 209ページ

そんなむずかしいことやあらしまへん。あたしは神の子やのうて、人間の親が捨てはった捨子どす。

もう今では、捨子やったかてええけど……。

うちが中学にはいったころやったかしらん、お母さんがうちを呼んで、千重子は自分のおなかをいためた子やない、可愛い赤んぼをさろうて、車でいっさんに逃げたんや、言わりました。

210ページ

おおきいお書きやしたら？

215ページ

あれをかけて、お父さんお拝みやすの。

お父さんはあの尼寺で、なにもしていやはらへんらしい。

お母さん、呼吸どすがな。

216ページ

秀男 お嬢さん、千重子さんのおみ帯どすか。

228ページ

かんにんしとくれやす。

あかんとは言うとりまへん。

229ページ

お腹立ちまっしゃろけど、この帯はわたしに織らせてほしいのどす。

嵯峨の尼寺にこもって描いたて、お言いやしたやろ。

230ページ

おうちへお帰りやす。

真砂子 千重子さん、うちはな、千重子さんのことを言うてるのえ。

240ページ

どうして、こないきれいなお子が、生れて来やはるのやろ。

千重子さん、あのひと、よう似てる。千重子さんにそっくりやないの？

ふしぎや思わへんの、千重子さん、よう見とおみやす。 241ページ
他人のそら似いうことあるけど、こわいほどやわ。

おうちのかた、丸太の行列のなかに、住んどいやすのやな。

242ページ

ああ。二階に洗濯ものが干したあるさかい……。

千重子さんみたいなお嬢さんは、なんでも感心しやはるけど。

ところで、千重子の双子の姉妹、苗子も次のように千重子と同類の言葉使いをしている。

京都市に合併されて北区中川北山町になっているが、「百二三十戸だから、村という方が、ふさわしい（240ページ）」と書かれている北山杉の村に育った苗子が、街中の千重子たちと同じようなことば使いをしているのは、川端康成の浪漫的なこの小説にはふさわしいし、もう一人の千恵子として現れた苗子には、その方がふさわしいからかもしれない。少なくとも高雄の奥にある山村の住人であることを誇張してわざと異なった位相語を使わせるような方法は取っていないのである。

苗子 あんた、姉さんや。神さまのお引き合わせです。 255ページ

ようわかりました。お嬢さん、かんにんしとくれやす。

ふた子やいうことどすさかい、姉か妹か、わからしまへんのやけど……。

そうどすか。神さまに、なにをお願いしといやしたの。

時代祭に、誘うとくれしたときかて、秀男さんは、時世よそおいの行列よりも、背景の御所の松のみどりや、東山の色のうつり変わるのを、見てはるようどした。 311ページ

(以上、資料『新潮現代文学1 川端康成(古都・眠れる美女)』1979年5月)

もし、現実の方言にリアルに描けば、この分かれて育った双子の言葉使いにいま少しの相違が現れたのではなかろうか。苗子は、もう一人の千重子として造られた人物であるが故に、言葉使いが千重子と相違してはいけなかった、という仮説を立てておきたい。

② 映画のなかの京都弁

京都弁が使われている古い映画として、大阪弁でもあげた溝口健二監督の『祇園きょうだいの姉妹』(公開1936年監督・原作 溝口健二 脚色 依田義賢 出演 山田五十鈴、梅村蓉ほか)がまずあげられる。以下、下線はいかにも京都弁らしい付属語に引いた。

(場面 芸妓の家)

呉服屋の旦那 へえ、ちょっと話がおしてな。

芸妓おもちゃ ほんなら、まあ、どうぞ。おあがりやしとくれやす。

旦那 あがらしてもらいますわ。

芸妓 どうぞ。

旦那 いや、ま、どうぞ。かまわんとくいとくれやす。

さっそくどすが、話というのは木村のことどすねん。

ええ、なんどすか、木村が梅吉つあんの衣装こしらえてあげた言うてますが、

そら、ほんまどすか。

芸妓 ああ、あれどすか。へえ、あれなら、こないだ、いただきましたけど。

旦那 そうあっさり言われたらかなわんな。あんたかて廓の人なら、だいたい、呉服屋の番頭が五十円以上もする着物を人さんにただで差し上げるというような、そんな気のきいたまねができるもんか、いうことは、たいてい分かっているやろ思いまするがなあ。(略)

— 間 —

芸妓 こっちで、なんぼお世話お世話になりたいと思うても、なかなかお

世話しとくれやすお方がおへんさかいに。(略)

まあ、お口のうまいこと、それがほんまなら、よろしおすねんけど。

(略)

そうどすえ。

(場面 芸妓の家、別の日)

芸妓 姉さん見とおみいな。りっぱやろ。

よう似合うなあ。よう商売したらこんなもんや。

すきなもんは、たと買うてもろて、

贅沢な真似ができて、どうえ。

姉さんは、そんな気やさかいあかへんねわ。

ええ歳して、いつまでもががつ働かんなんねや。(略)

姉 今日、はっきり話決める言うてはったんやけど。

登場人物や話相手、状況による言葉遣いの差が古い京都弁を使って表されている。

いまは、おそらくめったに聞かれなくなったであろう京都弁の待遇語が、同じ溝口監督の次の作品に使われている。

『祇園囃子』(1953年 溝口健二監督 出演：木暮実千代、若尾文子、浪花千栄子ほか)

(場面 神社)

女将：だいたいあんたなへ、

旦那も持たんと、妹引き取るやて、大きな間違いえ。

なにも、そない一人で無理せんかて、どなたかの

お世話におなりたらどうえ。

(場面 置屋)

女将 あんたあ、十五日のふじまの会

どうおしる。東京へ行きるか。

芸妓 へえ、行きたいのどすけど。

女将 お行きたらどうえ。

楠田さん、連れて行ってもええ、言うてはったえ。

女性語で、目下の親しい者に使われる「お（動詞連用形）る」の例がここに見られた。この待遇表現は、今では珍しいものであろう。（注12）

まとめに代えて

関西弁の使われている資料は多い。実は、上記の資料の一部を除き大部分は、甲南大学の2008年度後期の講義「関西のことばと文学」であつたのであるが、このほか、ここでは省略したいいくつかの映画、マンガ、小説、落語、漫才、などの資料があつた。また、講義の準備段階ではさらに多くの資料があつた。ほかのジャンル、たとえばアニメ、流行歌などは、ここではすべて省いている。我々は、CM、広告ポスター、インターネットの掲示板、ケータイ・メールなど、さらに多くの関西弁資料を日常的に眼にし、耳にしている。

それらを収集し、分析する作業については、後日を待つ。

(注)

- 1、ちなみに、平成21年版小学校指導要領「国語」の（第5学年及び第6学年）では、事項に「共通語と方言の違いを理解し、また必要に応じて共通語ではなすこと」があり、同中学校指導要領「国語」の（第2学年）では、「話しことばと書き言葉の違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること」がある。
- 2、山下好孝『関西弁講義』（2004年2月212ページ）では、早田輝洋『音調のタイポロジー』（1999年）を引いて、関西弁を音調語、標準語を狭義のアクセントと位置付けることが可能だとする。
- 3、鎌田良二「尊敬表現『て』について」（『文学・語学』1962年9月）
- 4、「田辺聖子作品における関西方言について」『甲南大学紀要 文学部編』153（2008年3月）。
- 5、参照 岡本牧子・氏原庸子『新訂版 聞いておぼえる関西（大阪）弁入門』2006年12月68ページ）に、「女性でも強い感情を表すときは男性言葉に近くなるので」このヨルを使うとある。
- 6、注5に同じ。
- 7、棟垣実編『近畿方言の総合的研究』昭和37年3月山本俊治「大阪府方言」458ページに「女子ことばにあって、ヤハル・ハルより待遇度が下がると、ヤル・ヤを用いる」と

ある。

- 8、日本のことばシリーズ29『奈良県のことば』27ページに、奈良県の女性語に、ほぼ同じ待遇に用いられる伝統的なヤルがあり、近年大阪方面から伝播したヤルとアクセントが異なるという説明がある。
- 9、『てんこもり！6代目 笑福亭松鶴全集 解説書』NHKサービスセンターの「年譜」によれば、松鶴は、大正7年に大阪市西区に生まれ、昭和7年に心齋橋筋へ丁稚奉公にあがっている)
- 10、落語を資料とした大阪方言の研究に真田信治・金沢裕之・中井清一『二十世紀初頭大阪口語の実態——落語SPレコードを資料として』1991年、大阪女子大学国文学研究室編『上方文化—上方ことばの今昔』1992、金沢裕之「落語の上方弁と漫才の上方弁」(『解釈と鑑賞』1987.7) などがあるが、ここでは触れる余裕がなかった。なお、平山輝男編著 日本のことばシリーズ27『大阪府のことば』1997年7月に「明治期までは、「…テジャ」「…テヤ」という、「テ」を使った敬語表現が広く用いられていたようである」とある(郡史郎「大阪方言の特色」41ページ)
- 11、「神戸の文学と関西方言」『甲南大学紀要文学編』1989年3月(拙著『日本語文法の原理と教育』1997年1月に所収)で触れたことがある。
- 12、京都弁のオ+動詞連用形+ルの用法については、平山輝男編著 日本のことばシリーズ26『京都府のことば』1997年2月 明治書院 中井幸比古担当「京都市方言」33ページ参照

その他参考文献

坂口保編『方言ところどころ』1963年4月

金沢裕之『近代大阪語変遷の研究』1998年5月

陣内正敬・友定健二『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』2005年12月

拙稿「神戸市におけるテヤ敬語の衰退」(『川口朗先生退職記念文集』1989年5月『日本語文法の原理と教育』1997年和泉書院所収)。